

# 「ザ・ドラえもんズ」について雑記

法学部 4 回生 福田裕太

※表記の都合上、作品名を以後「ドラえもんズ」とします

※扱う範囲は「ドラえもんズ」の劇場版作品のみとします

## ●何故いま「ドラえもんズ」か

何故、いま「ドラえもんズ」に焦点を当てるのか？……特に理由はありません。別に今年がデビュー何周年であるとか、この誌に先行して復活したとか、そんな特別な事情は皆無です。ただこの項を作ったのは「何故、いま～」と一度言ってみたかった、これに尽きるのです。

さて 15 年前だったら、「ドラえもんズ」について何か書くにあたり、その全作品に目を通して検証を行い、いわゆる「ザ・ドラえもんズ完全ガイド」とか「ザ・ドラえもんズ大辞典」なんてものを作れば大層重宝されたことでしょう。しかしインターネットの発達した昨今、パソコンを開けば「ドラえもんズ」の情報なんて作品を介さずともドンドン入ってきます。どこから拾ってきたのか、ちょっとしたエピソードや制作の裏話なんて出された日には、こっちには全く勝ち目がありません。

しかし、ネットが発展し「ドラえもんズ」についての情報が一般人にも充実したものとなっていくのと時を同じくして、劇場から「ドラえもんズ」は姿を消しました。現在進行形で情報が増えていたはずの項目の成長が、突然止まってしまったのです。終わったのではなく、止まったのです。

思うに、「ドラえもんズ」は歴史になり損ねているのではないのでしょうか。勿論、それは劇場版での「ドラえもんズ」について、正式に終わったのかどうかすら判然としないという難しい事実に困る所が大きいでしょう。しかし、ネットの台頭や特に「ドラえもん」自体の変化が進む中での「ドラえもんズ」のフリースは、やはりその時代に成長した僕にとって強烈な違和感を持って心の中に在るのです。

情報は溢れども総括されることはない「ドラえもんズ」、ここではちょっと大きくなった目線で改めて「ドラえもんズ」を考えてみたいと思います。特に目新しい情報があるわけでもありません。理解が更に深まるわけでもありません。ただ、「当たり前」を考え直してみる、これで勘弁して欲しいのです。

## ●異端児「ドラニコフ」と「ドラえもん」

「ドラえもんズ」での「ドラえもんズ」の一つの特徴は、各キャラが世界各国を表している点です。それは外見・名前・性格・行動・道具など多岐に亘るのですが、そ

れをフィードバックして考えると意外と面白い結果が導かれます。

例えば「王ドラ」。確かに見た目から分かり易く中国代表ですが、「女性に弱い」「カンフーが強い」「常に敬語で真面目」などからは、中国国民というより明らかにジャッキー・チェンの影響が見られます。というより彼については、ジャッキーのイメージとして見なければ中国要素はむしろ驚く程少ないのです。中国という国の「ドラえもんズ」での解釈は、ずばりジャッキー・チェンそのものということなのでしょう。

というように、さっき書いた「フィードバック」とは要はこういうことなのですが、そういう視点で見た時に明らかにおかしい連中がいます。「ドラニコフ」と「ドラえもん」です。

まず、「ドラニコフ」。名前やコサックダンスのスタイルから分かる通り、彼はロシアを表しています。

ここで少し話が逸れるのですが、本家「ドラえもん」においてもロシアという国はほとんど出てきません。あれだけ毎回毎回大長編で世界各地に行き旅行冒険を敢行してる割にロシアという土地が全く登場しないのはむしろ不自然とも言えるのですが、これも少し大きくなった目線ならすぐ分かる話で、「ドラえもん」の連載開始当時はテラントも雪解けも夢のまた夢、バリバリの冷戦状態だったというのが理由でしょう。仮にソ連での大冒険で一本映画を作ったとしたなら、さぞや全編通して息苦しい映画が出来た筈です。

さて話を戻すと、僕が「ドラニコフ」の特徴でまず思い浮かぶのは「言葉が話せない」「狼男」「タバスコで火炎放射」などなのですが、この中の一体どこにロシア要素が有るのか不思議です。勿論、マフラーと帽子とコサックダンス(のような歩き方)から直感的に「あ、ロシアだ!」と分かるのですが、正直、旧ソ連の東欧諸国でも別にイメージとしては間違いではありません。「ドラえもんズ」で、ここまで元の国を逸脱しているのも珍しいものです。

恐らく、「ドラニコフ」の狼要素はシベリアからやって来たのでしょう。しかし、その国らしさを表す上でその国の動物をモチーフにするというのは、流石に無理があるなと思います。そこで、はっきりロシアと分かるよう素直にステレオタイプな「ロシア要素」を入れるとするなら…と考えると、僕にとっては以下のものが挙げられます。

「猜疑心が強い」「人称代名詞は「同志」「赤」「ウオッカ好き」

これはしかし…とんでもないヤツが出来上がってしまいますねー…。一気に映画が殺伐となること請け合いです。

「昨今のドラリーニョ同志の享乐的な姿は墮落した反革命的精神の発露で目に余る!同志は革命を妨げる帝国主義者の手先だ!今すぐ自己批判したまえ!!(ウオッカグイ-」……………モチーフを狼にして、正解です。

ところで、あくまで「ドラえもんズ」の中だけで考えた場合、逆説的に“ドラえもん”という存在がおかしなものになってきます。勿論、「ドラえもんズ」にしても根底は“ドラえもん”ありきななのでそれを言っても始まらないのですが、先ほどのフィードバックという考え方を当てはめると“ドラえもん”という存在からも何らかの国が導かれて然るべきなのです。

しかしこれは、言うは易し行うは難しくてヤツで、実際のところ「ドラえもんズ」においての“ドラえもん”というのは実に出番が少ないのです。僕たちは「ドラえもんズ」以外の“ドラえもん”というのに馴染みがあるので、直感的についつい“ドラえもん”=日本と考えてしまうのですが、実のところ「ドラえもんズ」の世界だけではそういう結果には行き着きません。これに対する僕なりの答えは次の項に書くとしても、まあ無個性という個性で以て日本を表そうとしているのであれば、それはそれでジョークとして成立しているのかもしれませんがね。

### ● “親友テレカ” という道具

連中は“親友テレカ”なる道具を使います。“カード”と云ってるものを道具と呼ぶのは抵抗がありますが、まあひみつ道具の一種です。

本来のテレカというモノは僕たちの世代にはお馴染みのものですから、今更説明不要でしょう。電話が終わると[ピピーッピピーッ]って出てくる、アレですよ。俗に“テレフォンカード”略して“テレカ”ですが、「ドラえもんズ」においては“テレカ”は“テレパシーカード”の略だそうです。僕自身、この事実は最近知りました。

この言葉の掛け具合はF先生っぽくて上手いなあと今更ながら感心するのですが、しかしどう見てもアレは“テレフォンカード”にしか見えません。だってちょこっと右下凹んでるじゃん…！裏は灰色だし…。ていうか“親友テレカ”型のテレカ持ってたし…。

まあそれはさておき、“親友テレカ”というものはどうしても“カード”という特徴に目が行きがちですが、間違いなく道具ということをまず確認しておきます。カードとは——色々定義はあると思いますが——基本的に情報を扱うものであるのに対し、“親友テレカ”は明らかに道具として情報以上のものをもたらす働きをしているからです。このように、一道具として“親友テレカ”を改めて考えると、また色々不思議な特徴が出てきます。

まず、「“親友テレカ”を使う」という言い方をした時、それは主に“親友テレカ”をかざすという行為に集約されます。専らかざすだけなのです。

一方で、そこから得られるエネルギーや効用は絶大です。世界征服すら出来る(らしい)エネルギーが割と安定して得られます。この何でも出来るという特徴にも注目です。

さらに、そのエネルギーを“ドラえもんズ”は完全にコントロール出来ています…多分。少なくとも、出来てるように見えます。劇場版での結末は実は毎回毎回結果オライ、ということでは無いはずです。また、強力なエネルギーにはお決まりの副作用や代償も、どうやら無いようです。

これらの特徴から導き出される結果は、“親友テレカ”なる道具が一種のチートで、且つとんでもなく没個性だということです。最終的にこの道具を出して全てカタが付くんなら、「ドラえもん」でのひみつ道具を上手く使う醍醐味というものが全く有りません。

随分と前置きが長くなりましたが、ここに「ドラえもんズ」の本質を見ることが出来ます。つまり「ドラえもん」という作品が、“ドラえもん”が出す道具のバラエティで楽しむならば、「ドラえもんズ」という作品は、“親友テレカ”という道具を使う“ドラえもんズ”のバラエティで楽しむ作品なのです。有り体に言えば、いつも同じヤツが出す違う道具の物語か、全く違うヤツが使う同じ道具の物語か、という違いです。“ドラえもんズ”の面々が国という基準で強烈にキャラ付けされ、また毎話の主人公が各々の個性を生かした道具の使い方で解決を図るという構図は、そこにこそ作品の本質が有るからなのです。故に、「ドラえもんズ」作品で“ドラえもん”が主役になりえないのも、むしろ扱いが毎回小さいことも、当然と言えます。

## ● “ドラえもんズ”という国際機構

“ドラえもんズ”は、お菓子作りやロボットレースに終始したりする一方で、しばしば地球の危機を救います。本来的に正義の味方のような定義付けは無いはずなのですが、地球の危機や人類の危機には結構敏感です。カッコつけた言い方をすると、このような武力行使も辞さない超国家的組織としての“ドラえもんズ”を考えると、また幾つかの面白い特徴が見られます。多少強引ですが、一つの国際機構としての“ドラえもんズ”を考えてみましょう。

まず注目すべきは、その組織としての構成がなかなか理想的であることです。構成というのは要するに彼らを国の象徴として考えた場合ですが、アメリカ2、アジア2、ヨーロッパ2、不明1というのは、適度に分散されています。少なくとも、昨今改革が叫ばれている国連安保理よりは代表性が高いと言えるでしょう。

ICJ(国際司法裁判所)の裁判官任用を見ても分かる通り、国際問題の解決を一般的に行おうとするならば世界の諸地域の諸文化を過不足無く取り込んだ柔軟で説得的な解釈を行う能力が必要です。その点“ドラえもんズ”は、完全とはいかないまでも世界各地の文化が比較的網羅されており、それも国の規模や人口、軍事力などではなく専ら文化による棲み分けへの努力が為されています。もちろん、その構成に恣意的なも

のではありません。この点において、まず超国家的活動を行う正統性の下地が有ると言うことが出来るでしょう。

また、「ドラえもんズ」における活動が、専ら個人(各個体?)の資格において行われている点も、ICJと類似しています。彼らは彼らの国の国益により動くことはありません(少なくとも、劇場版ではありません)。もしそのようなことになれば、まず“ドラニコフ”と“ドラ・ザ・キッド”の仲が悪くなるでしょう。更に進めば、“ドラ・ザ・キッド”と“王ドラ”や“ドラメッド三世”との関係も微妙なものになるかも知れませんね。

「キッド！また我輩のご近所さんのトコ行って悪さをしたアルね！！」

「いやぁアイツら絶対悪だくみをしてたんだよ。だからオレが一発かましてさァ…」

「信用できないでアール！！もうキッドに油の融通はしないでアール！！」

「そう怒るなよオドラメッド三世。無理に行ったのはオイラが悪かったよォ…」

………

ところで、“ドラえもんズ”は“親友テレカ”によって強力な力を持ち、しかもその力を実際にしばしば使いますが、その力の源泉は実のところ彼らの友情です。しかも「怪盗ドラパン謎の挑戦状」から解釈するに、それは友情をパワーとして発揮しようという意志を持った上でかざすことによって初めて有効になるようです。ここからは類推の域になるのですが、友情を積極的に発揮するということは、発揮する際にその力の目的にも暗黙のうちに賛同しているという証左ではないでしょうか？「これでいいんだろうか…？」などと自問自答しながら“親友テレカ”をかざしても、強力な友情パワーは得られないと考えられるのではないのでしょうか？

前書きが長くなりましたが、要するに“親友テレカ”による強力な友情パワーは、“ドラえもんズ”メンバーの暗黙の了解による全会一致を経た上で発動されていると言えます。彼らの強力な力の行使には、実は厳しい制限がかけられているのです。

以上で見た“ドラえもんズ”の特徴を現代世界に置き換えると、通念や道義といった受け入れ易い合理性を持つICJと、全会一致によってのみ実効的強制力を持つ国連安保理の融合的組織であるということになります。強制力が担保された国際裁判所、それは現代国際社会において画期的な存在です。「国」という客観的印象が絶対的でないテーマを負うにも関わらず、我々が“ドラえもんズ”に惹かれ続けるのはこういう正統性が有るからなのかもしれません。まぁ、絶対そうじゃないと思いますが(笑)。

## ●最後に

「ドラえもん」の声優陣の一新が行われてもうすぐ10年が経とうとしています。既に、本来的に「ドラえもん」が対象とする子供はある程度の数となり、いわゆる“わさドラ”が馴染みの“ドラえもん”だという世代も大分出来つつあるのではないのでしょうか。“大山ドラ”が歴史となっていくのは寂しいことですが、新しい“ドラえもん”が子供達に素直に受け入れられるのはそれ以上に喜ばしいことだと思います。

しかし、では「ドラえもんズ」はどうなのでしょう。冒頭で「ドラえもんズ」は歴史になり損ねていると書きましたが、一つのシリーズとして総括されることのないまま一時停止状態の「ドラえもんズ」にとって、声優交代に伴う視聴者層の世代交代は致命的と言えるでしょう。“ドラえもん”という本質的に不変なキャラクターを通して“大山ドラ”が「わさドラ」世代に親しまれることはあるとしても、彼らが“ドラえもん”を性質上必要としていない「ドラえもんズ」に食指を伸ばすでしょうか。「ドラえもんズ」が歴史にもならず埋もれていく、それは無条件に悲しいことです。

あれだけ絡んでおいて、「ドラえもん」本編には全く登場しない「ドラえもんズ」。ストーリーが、どんどん有って無いようなものになる「ドラえもんズ」。ヒロインのキャラデザが藤子作品っぽくなくて、やけに時代を感じさせる「ドラえもんズ」。…改めて「大人の目線」から見ると、「ドラえもんズ」の色々な点が目につきました。もっともっと後の時代の藤子ファンは、この作品を客観的にどう見るでしょうか。作りが粗い？広がりがない？キャラ消費アニメ？ファンだけが相手にするマイナー&マニアック作品？うーん…

それにしても、久々に観た「ドラえもんズ」は楽しいなあ。良いなあ。